

イギリスに渡る

平井信義

(一)

ドーヴァー海峡を渡る船旅を、楽しく想像していた私には、実際には非常に苦しい十数時間になってしまった。

ベルギーの西海岸オーストエンドから船に乗りこんたのであるが、港を出るところから北風が強く船に吹きあて、しだいに波が荒れてくると、船の動揺ははげしくなった。甲板に椅子をだして坐っていた人たちも、波のしぶきを受けて椅子を後退させたので、甲板は足の踏み場もないくらいにぎっしりと詰ってしまった。船室へ下りていった人も「そこには席がまるでない」と指をならしながら帰ってきた。

私の隣にはドイツ人の母親と小学一年生くらいの子どもが坐っていたが、話を交さないうちに子どもが船酔いに苦しみ始め、それを介抱している母親も、まもなく苦しみはじめた。そこそこでどうよいうな状態が起ると、私もあやしくなってきたが、目をつぶっては日

本に帰ってからの仕事の計画を楽しく頭に描くよう努力して、かろうじてもちこたえた。

午後二時半に出航した船は、ロンドン郊外の港に六時半にはつくり子定であったが、風のために、大部遅延しているという話が、隣りや後で囁かれた。七時すぎ、右手にイギリスの山々を薄黒く眺め、点々と灯る光を見て、ほっと安どはしたが、いっこうに港につく気配がない。「何時頃につく予定でしょうか？」と背後の女の人が、ちよほど乗合せたボーイにたずねたが「船長だけが知っていることです」と答えたまま、忙しそうにいつてしまった。その女の人は肩をすくめてから、ジャケツの前をかき合せた。しかし、顔の表情をとくにかえないのがどうしたことかと訝った。

日はとつぷりくれて、星の輝きが飛び散るようであったが、風は一向におさまらない。寒さはしだいに骨身にしみてくる。食べ物ももはや売っていない。水ものもない。空腹と寒さの一人旅は、じつに

心淋しい。いつ着くともわからない船の上である。着いたとしても真夜中のロンドンに何が待っているだろうか。八時、九時、十一時と過ぎていったが、船は港に着けないでいる。私はいらいらした。腹がたってきた。

ところが、廻りにささやきあって坐っている人を見ると、腹を立てているのは、自分ばかりではないかと訝かしく思わざるをえなかった。みな、じつとうずくまり、寒くなると椅子から立って足踏みをしている。それをくりかえしているのである。アナウンス一つもない。ボーイにきいてもわからないという。そうした不安定な状態になると、恐らく、わが国であつたら、たちまち怒号が湧き起るだろう。船長や船員を詰問するだろう。早く何とかしろと叫び、あるいは不満を船会社に向けてなじり合う声がかれるだろう。ところがこの船の中では、到着時刻を五時間以上も過ぎて夜の十二時を廻っているのに、何ごとも起らないのである。どの人も、私とどうように、ほとんど飲まず食わずである。船はあい変わらず大きく揺れている。イギリスの灯をちらちら見ながら、港につけないのである。それなのに、寒さをさげるために自分を守る行動しかとらない人たち。神に自分の体をまかしてしまっているのだからか。社会的な訓練がいきとどいているのだろうか。船長の人物を信じきっているのであろうか。私には理解できなかったけれど、私自身もそれらの人の態度にさそわれて、椅子にうずくまり、レインコートで寒さを防

ぎながら、しかし、しだいに気持がおちついてくるのを感じていた。午前二時すぎ、ようやく、船は波止場についた。疲れた顔つきの人々が、ほっとしたような明るい目の色を示し合つて、たち上がった。しかし、われ先と争つて降りようとする人は一人もない。荷物をかかえたまま一歩一歩と人の波にしがたつて、船の乗降口からクラップを降りていく。その波にしたがつて私も、イギリスの土をはじめ踏んだ。

その後、日本に帰つてからも、混んだ乗物や、不時の停車に会うたびに、このときの情景がいつもよみがえってくる。そのたびに、あの船の中でどうして騒ぎが起らなかったのか、じつに不思議な気持に打たれるのである。騒ぎ立てても、無駄であるばかりか、かえつて船長や船員の仕事を多くし、気持の負担を増すばかりであることを知っている。静かにして、船長に全責任を負わせた方が、自分の立場を守ることだと、知り抜いている。——私にはあのときの人の動きがそう思い返されてならなかった。何か事件が起ると騒ぎ立て、かえつてそのための混乱がひどくなる、この点に無神経な日本人なのではないか。子どもの教育のことについても、その点で、ずいぶんたくさん問題があるように思えてきた。

(二)

イギリスでは、モズレー病院の小児部(問題児の収容施設)を見学すること、精神衛生のクリニックを見学するのが楽しみであつ

たが、第一歩から、町の人々の動きに心をひかれてしまった。

知人をたずねるために、バンク・オヴ・イングランドの付近で地下鉄からだと、私は思わず足を止めたのである。ちょうど、昼下りであった。目の前にひらけたのは、トップハットやシルクハットの紳士である。モーニング、または黒服に、ステッキまたは雨傘を小脇にかかえ、手には新聞または白い手袋を握って、目の前の通りにも向う側の通りにもいるのではないか。しかも二人・三人というのではない。歩いてゐるほとんどの人たちが、そうしたいでたちなのである。私の前を何人もの紳士たちが通っていく。その紳士たちは、目をしばたきながら見つめてゐる東夷あづまびとの私などには、一べつもくれない。目的は全く一つ、それ以外には行動しないとでもいうように、右から左、左から右へと歩いていく。ドイツでは、じろじろと穴のあくほど眺められた東洋人であるが、ここでは、同類の人種とみられているのか、相手にされない人種なのか、……イギリスに長く滞在している友人は「しんは馬鹿にしているのだよ」と私に説明してくれたが、必ずしもそののみとは思えない。むしろ、私にはその紳士たちが何か苦しうにきどっているように見えて仕方がなかった。そして、それら紳士とゆき交うたびに、私の顔には微笑が湧いてきて仕方がなかった。イギリスでのこの微笑は、衛兵交替の儀式を見終えたあと、爆笑に変つてしまった。十時半から一時間余りのこの儀式は、毎日毎日くりかえされてゐるのである。それもただ事ではない。パッキンガ

ム宮殿の前に待ち構えてゐると、鉄格子を越して、中の衛兵の整列が始まる。その頃から、町の片隅に軍楽隊の吹奏が近づいてくる。

その後には騎馬隊・衛兵の列……。とにかく、たいへんな儀式である。すべてで百人以上の兵隊であろう。待ちかまえてゐる見物人が払いのけられると門があいて、一隊が中に入ると、交替の儀式。そして、任務を終えた兵隊が再びその門をでて、吹奏の音とともに、町の片隅に消えていく。その間一時間半。それぞれ目深く被った丈高い何とか帽、赤い服、黒光りのしている靴。——子どもたちならさぞ喜ぶだろう。眉一つ動かさないきまじめな顔、顔、顔。一条乱れぬ手や足のさばき、玩具の人形を見てゐると全く同じである。

最後の騎馬隊の後にそれぞれ散っていく見物人の波から離れると、私にはどつと笑いがこみあげてきて、歩きながら一人で「くっくっく」と、抑えてはこみ上げてくる笑いを、もはや止めることができなくなつてしまった。

どうして、ああした大衆とは無関係の表情や、態度をもつた人間を作ろうとするのだろうか。「行儀のよい紳士」それもよい。しかし、ああした形の中に、本当に人を思い遣る気持とか、どの人間にも暖い扱いが生れてくるであらうか。世界における最も上流の紳士。それはイギリスに多いかもしれない。しかし、ああしたイギリス人の顔のために冷たい扱いを受けた植民地ではなかつたらうか。いまだら、それをどうこう言おうとは思わぬ。

ロンドンでもスラム街といわれる東地区にいて道に迷い、地図をひろげていたときに、貧しい格好をした太っちょのおばさんが、近寄ってきて「どこへいこうとなさるのかね？」ときいてくれたことと思ひ合せるのである。私の行く先を告げると、下げ革の中から鉛筆を出して、地図の上に行く方をしるしてくれた。「ありがとう」と礼をいうと、自分の方から何回も「ありがとう、ありがとう」と言つて、二重顎の溝をさらに深く刻んだ。イギリスでほのぼのと暖い人の心に触れた二、三の思出の一つである。

ロンドンの滞在中、もう一つ忘れ得ぬ光景がある。それは、ロンドン塔の前に眺めるベンチの横で、十七、八の男の子と女の子が、姿もあらわに抱き合っている光景である。そのような光景は、ハイドパークではいっそう目立った。無表情の紳士に対する若いものたちの反抗であろうか。それとも新しい時代の世界的な流れが、ここにも実現しているのであらうか。

イギリスでも、青少年のふしだらな態度が歎かれている。私を案内した病院の若い医者は、きれいに清掃してある応接室の床に、さかんに煙草の灰を落した。私が自分のポケットから出した紙で箱を折って灰皿にしたとき、いあわせた五十がらみの医者は、しずかに若い医者にそれをすすめた。しかし、若い医者は、別に顔を赤らめるでもなかった。

節操のない青少年。それ以上に問題の青少年はこのイギリスにも多い。その点でイギリスのおとなたちは、それらの青少年を本来のイ

ギリス人ではないと言っていると聞いた。すなわち、イギリスに連れてきた他国民が問題を起しているのです、本来のイギリスの子どもはそのようなことはしないといふのである。しかし、事實はどうもそうではないようである。実際に「バンク・オヴ・イングランドで見た紳士、衛兵交替の儀式——この二つの光景と、ハイドパークの若い人たちの情交の光景とは、何か深いつながりがあるように思えてならなかった。

青少年問題で悩んでいるのは、イギリスのみではない。西ドイツにおいても、フランス、イタリアにおいても、平和な国スイスやスカンジナビアの諸国においても、その増加が憂えられているのである。文明諸国に共通な現象であることを見逃してはならない。近代文明の影響をうけているわが国においても、その例に洩れないのである。けつして敗戦の影響のみではない。道徳教育の不足のみではない。むしろ、ドイツが指摘しているように、一つは暖い人間関係を阻もうとしている器械文明の影響であり、一つは早発化した青年期に身体教育と精神発達のパランスが欠けている点である。したがって、いままら道徳教育によって、もし徳目が掲げられるようになっても、それはむしろ効果のないことであるばかりか、かえって若い人たちの反発にあつて、益々混乱を招くのではなからうか。

近代の器械文明の波の中で、いかに暖い人間関係を保つか、その点に集中して考えると、子ども青年期の早発化を防ぐことを考えるべきで、それが青少年の問題を解決する方法なのである。